

奄美諸島の古墳時代併行期の土器

中村友昭
熊本大学

NAKAMURA Tomoaki
University of Kumamoto

はじめに

筆者は古墳時代の南海産貝交易について研究を進めている。ただ、その基礎になる琉球列島の古墳時代併行期の土器編年にはいまだ流動的な部分が少なくない。貝交易で重要な役割を果たすと予想される奄美諸島についても、編年が確立されていないのが現状である。

今回マツノト遺跡の調査にかかわって、マツノト遺跡出土の豊富な土器を実見する機会が与えられたので、この資料と熊本大学の所蔵する関連資料を対象に分析し、この問題に取り組むことにした。

1. 問題の所在と研究の目的

南島と本土地域における年代対比の手段として、本土の時期区分に帰属する遺物と在地遺物との共伴関係の検討が挙げられる。奄美諸島においては、搬入された弥生土器やその影響を受けた土器から、弥生時代併行期の存在が指摘されてきた（堂込1998、新里1999ほか）。また、この過程で、兼久式土器という奄美諸島独自の在地土器の研究もなされてきた（河口1974、高梨2005、中山2005ほか）。当初は、弥生時代併行期という位置付けがなされていたものの、出土状況や型式学的変遷から、弥生時代を時期的に下る土器という見解に至る。加えて、用見崎遺跡における広田上層タイプ貝符ならびに開元通宝との共伴や、面縄第1貝塚出土の開元通宝との関係から、少なくとも7～8世紀以降には存在する土器であることが判明している（木下2003）。

一方で、奄美諸島の古墳時代併行期について直接指摘されることは少なかった。その要因は、奄美諸島も含めた南島地域全体が古墳非築造地域であることや、明確な古墳時代帰属の遺物との共伴が僅少であることなどが考えられる。現状では、弥生時代併行期と兼久式土器期との間に入る時期を古墳時代併行期として設定している状況である。近年、弥生土器とも異なり、兼久式土器より下層に出土するスセン當式土器を、古墳時代併行期とする見解がだされている（新里2000、高梨2005）。しかし、「系統的流れも追にくい（中略）、多数の型式を含む可能性が大きい」（新里1999）とあるように、依然として古墳時代併行期の一様相を指摘している段階である。このように、古墳時代併行期の設定については、弥生時代併行期の土器・兼久式土器・それらと異なる在地土器との層位的関係性が根拠となっている。しかし、この在地土器そのものの変遷について、総括的な検討が不足している点を現状の問題点として挙げたい。

先学の研究者による研究成果の蓄積や調査例の増加などから、弥生時代併行期の土器や兼久式土器とも異なる在地土器について、直接論究することが可能な段階にきている。また、スセン當式土器の年代的位置付けに代表されるように、層位的関係による研究方法は非常に重要である。そこで本論では、弥生時代併行期の土器や兼久式土器とそれ以外の在地土器群の変遷を、各遺跡の層位的変遷と照らし合わせながら検討をおこなう。そのうえで、弥生時代併行期と兼久式土器期との間の時期にあたる奄美諸島の在地土器様相を示す。以上が本論の目的である。

2. 研究方法

鹿児島県大島郡笠利町のマツノト遺跡出土土器（1991年、2004年調査）より設定した分類（以下、マツノト分類）をもって検討をおこなう。マツノト分類では、①兼久式土器の定義を満たす土器群（Ⅰ類土器）、②兼久式土器の定義を外れる在地土器群（Ⅱ類土器）、③外来土器群（Ⅲ類土器）と設定した。マツノト分類におけるⅡ類土器は、弥生時代併行期土器とも兼久式土器とも異なる在地土器であり、今回おもに対象とする資料である。なお、河口貞徳氏が提唱した兼久式土器の定義は、頸部に断面三角形の突帯文やそれに刻み目を施したものを1条めぐらす、という点に集約できる（河口1974）。よって、マツノト分類のⅡ類土器とは、それ以外の有文と無文の在地土器ということになる。

具体的には、Ⅱ類土器を対象に、文様と形態における3種類の分類概念で土器を分類し、この基準を、層位関係の明らかな奄美諸島内の5遺跡に適用して分析し、比較検討をおこなう。最後にこれらを総括し、Ⅱ類土器期の土器の段階的変遷を述べる。

3. 分類案（図1～3）

マツノト遺跡出土の土器を対象として、文様、形態の二つの分類基準を設けた。前者については文様の有無と施文方法の2レベルで分類し（分類1）、後者では甕上半部（分類2）と底部（分類3）についてそれぞれ分類した。

分類1：文様による分類

まず文様の有無により大きく2分した。

- 分類基準①：有文
- 無文

次に口縁部における文様の施文箇所により分けた。

- 分類基準②：口縁部内面
- 口唇部
- 口縁部外面

次に、施文方法によって命名した主文様で分けた

- 分類基準③：沈線文
- 刺突文
- 貼付文

これらを更に文様の内容によって分けた。

- 分類基準④：直線文
- 曲線文

分類2：甕上半部形態による分類

甕上半部の屈曲の有無によって、i類とii類にわけた。それぞれに複数の形状を含むが、一括した。

i類：屈曲するもの

- ① 口縁部が大きく外反するもの
- ② 胴部が張り出し最大径を胴部に測るもの
- ③ 口縁部が大きく外反し、胴部も張り出すもの

ii類：屈曲しないもの

- ① 口縁部と胴部の径が同等なもの
- ② 最大径が口縁部にあたり、底部に向かって徐々にすぼまるもの

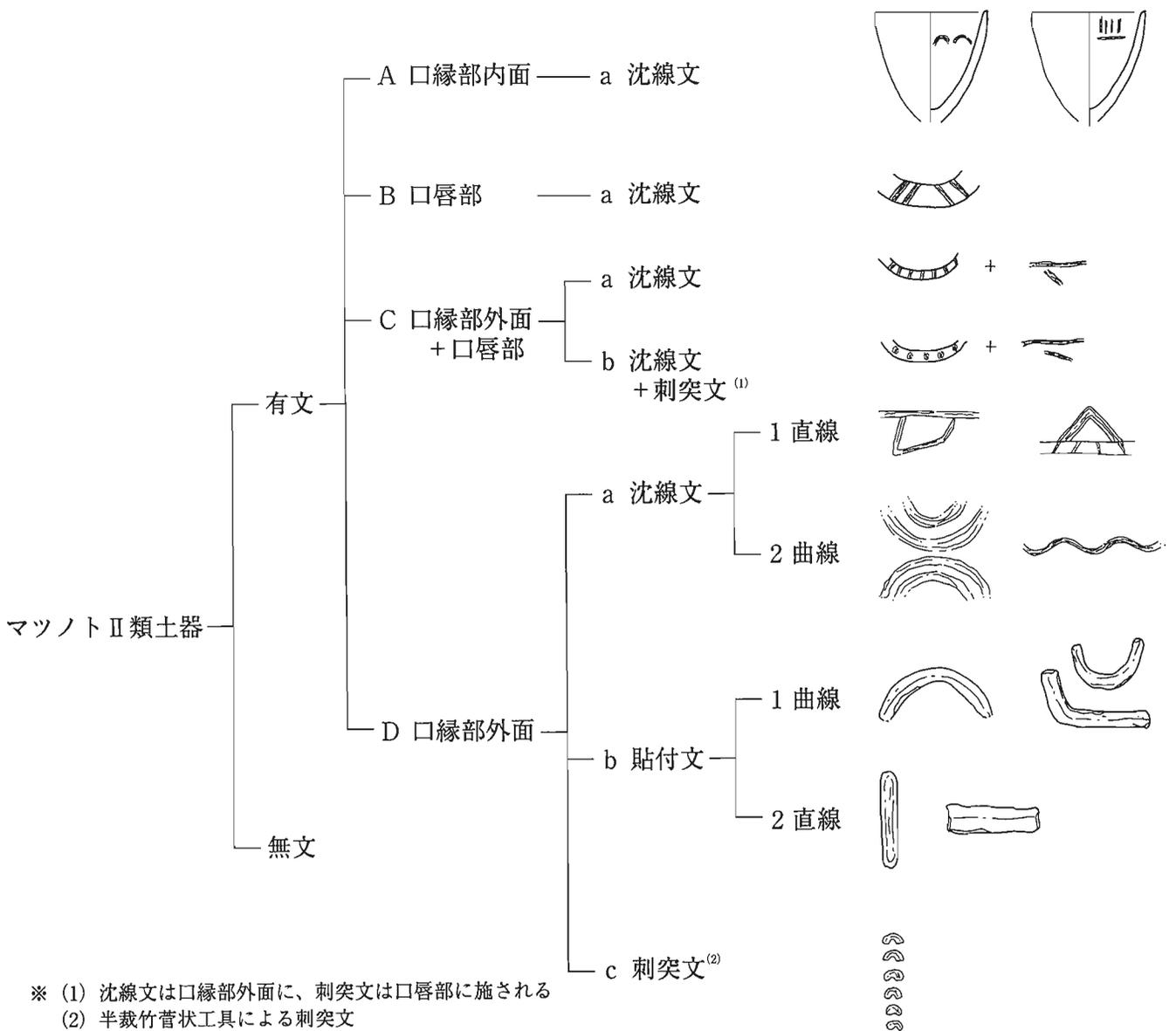


図1. 奄美諸島古墳時代併行期の土器分類1 (文様による)

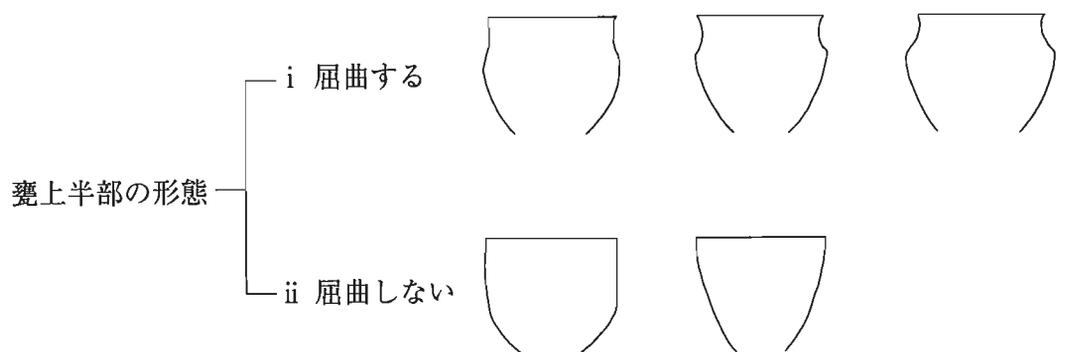


図2. 奄美諸島古墳時代併行期の土器分類2 (甕上半部形態による)

分類3：底部形態による分類

底部形態から以下の4種に分類した。

- ア類：丸底
- イ類：脚台
- ウ類：平底
- エ類：くびれ平底

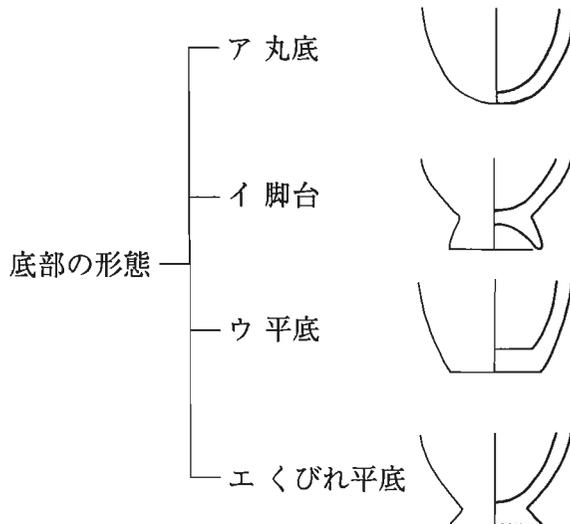


図3. 奄美諸島古墳時代併行期の土器分類3（底部形態による）

4. 分析

(1) マツノト遺跡の土器の分析

1) 層序的關係

マツノト遺跡は鹿児島県大島郡笠利町宇宿字マツノトに所在する（中山1992）。1991年の調査により第1文化層と第2文化層を検出しており、両層において様相の異なる土器が出土している。また、2004年調査においては、I類土器を包含するI層（以下、上層）と包含しないVI層（以下、下層）を検出した。1991年第1文化層と2004年上層は、出土土器の様相から同一のものと考えられるが、1991年第2文化層と2004年下層は、出土土器の様相が異なっている。この両層の關係性は、未だつかめていない。よって各層の時間的關係性は、第1文化層（1991年第1文化層、2004年上層）と、それより古い段階の1991年第2文化層および2004年下層とする。以下の検討は、自ら実見して確認した資料を対象としている。

2) 文様による分類（分類1 図4）

兼久式土器（I類土器）の出土を確認できるのは第1文化層のみであり、第2文化層や2004年下層には出土していない。またII類土器の割合は、第1文化層になると極端に低くなる。

第2文化層のII類土器は、口縁部外面・沈線文・曲線（Da2類）や口縁部外面・貼付文・直線（Db2類）、口縁部外面・沈線文・直線（Da1類）である。第1文化層では、第2文化層で顕著だったDa2類はなくなる。なお、2004年下層の土器は逆L字状の口縁部をなし、弥生時代併行期土器の特徴を有している。検出個体数は少ないが、この層を代表する土器と考えられる。

3) 甕上半部形態による分類（分類2 図5）

第2文化層は対象資料が少なく判然としないが、唯一の完形品から判断すると、屈曲しないもの(ii類)になる。第1文化層では、ii類が優勢なものの、屈曲するもの(i類)も4割ほど出土する。資料数にばらつきがあることを考慮しなければならないが、ii類からi類への変遷がたどれる。2004年下層では、全形を窺えるものが少なく判然としない。

4) 底部形態による分類 (分類3 図6)

第2文化層では、平底(ウ類)が確認できる。第1文化層では、平底とくびれ平底(エ類)がほぼ同等の割合で出土している。分類2同様、資料数の問題もあるが、ウ類からエ類の変遷が予想できる。2004年下層では、上げ底で外面を磨いた底部が1点出土している。

(2) 用見崎遺跡の土器の分析

1) 層序的關係

用見崎遺跡は、鹿児島県大島郡笠利町用見崎に所在する遺跡である(山田康弘・原田範昭1995ほか)。熊本大学による3度の発掘調査から、形成時期の異なる砂丘ごとに文化層を含んでいることが判明している。本論で対象とする土器群は、最初に形成されたA砂丘のXVI層、次に形成されたB砂丘のVIII層とVI層、もっとも新しいC砂丘の3層より出土したものである。

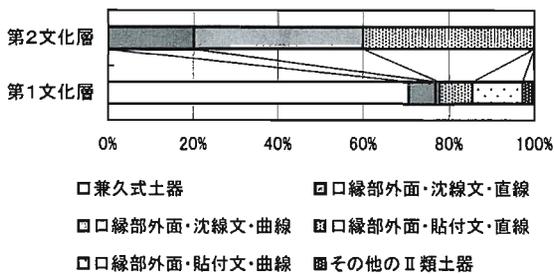


図4. マツノト遺跡・文様の変遷 (対象261点)

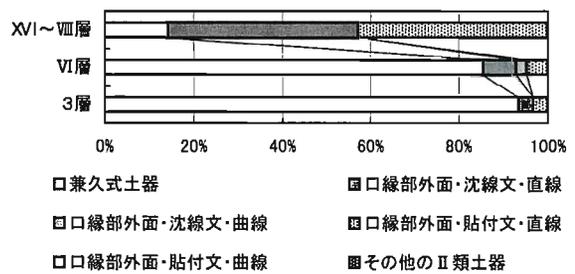


図7. 用見崎遺跡・文様の変遷 (対象79点)

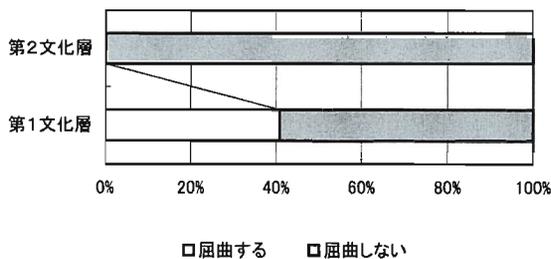


図5. マツノト遺跡・甕上半部形態の変遷 (対象305点)

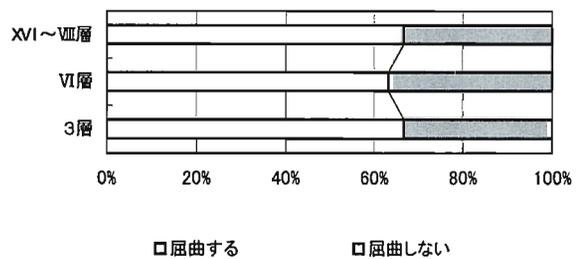


図8. 用見崎遺跡・甕上半部の変遷 (対象67点)

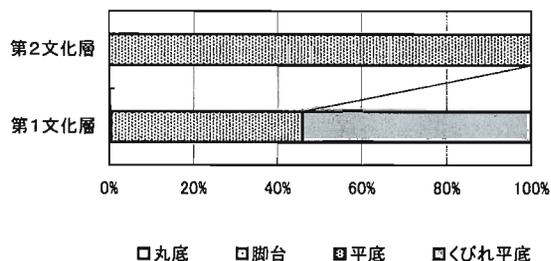


図6. マツノト遺跡・底部形態の変遷 (対象266点)

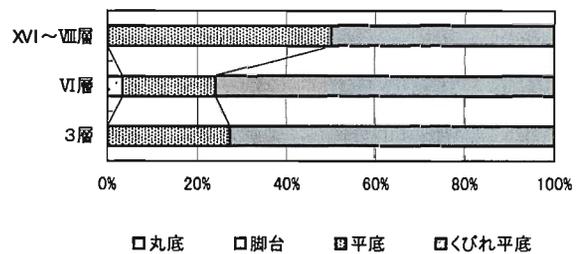


図9. 用見崎遺跡・底部形態の変遷 (対象42点)

2) 文様による分類 (分類1 図7)

兼久式土器 (I類土器) が出土しているⅧ層・Ⅵ層・3層では、その比率に大きな差異がある。また、Ⅷ層からⅥ・3層への変遷におけるI類土器の割合の増加に対し、II類土器の割合は極端に減少している。

XVI層では、口縁部外面・貼付文・直線 (D b 2類) のみの出土である。ただし、資料数は僅少である。Ⅵ層・3層では、I類土器が多数を占めるなか、沈線文・貼付文とも直線構成のD a 1類、D b 2類が主体を占めることを看取できる。これは、I類土器の増加に伴い、沈線文・貼付文とも直線化の傾向があることを示す。また、Ⅵ層と3層では、砂丘形成の新古関係はあるものの、文様変遷をみると極端な差異はないため、大きな時間差はないと考えられる。

3) 甕上半部形態による分類 (分類2 図8)

資料数のばらつきがあるが、全層を通じて屈曲するもの (i類) が優勢である。

4) 底部形態による分類 (分類3 図9)

XVI・Ⅷ層からⅥ・3層になるに従い、平底 (ウ類) とくびれ平底 (エ類) の比率が変化し、エ類が主体となる。

(3) 手広遺跡の土器の分析

1) 層序的關係

手広遺跡は、鹿児島県大島郡龍郷町大字赤尾木字牧に所在する縄文後晩期、弥生時代前期相当期、兼久式土器期の遺跡である (熊本大学考古学研究室1986)。層位的上下関係から、6つの文化層が確認されている。このうち、本論で対象とする土器群は、間層も含め3層にわたり出土している (3～5層)。5層では、弥生時代併行期の土器が出土する。

2) 文様による分類 (分類1 図10)

4・5層ではみられない兼久式土器 (I類土器) が、3層になって出現する。それにともない、II類土器は減少している。

5層においては、口縁部外面・沈線文・曲線 (D a 2類) と口縁部外面・貼付文・直線 (D b 2類) が確認できた。4層では口縁部外面・貼付文・曲線 (D b 1類) がみられる。3層になると、D b 2類は減少するものの、5層に引き続き出土している。これは、弥生時代併行期から兼久式土器期にいたるまで、D b 2類が存在していたことを示している。また沈線文においては、マツノト遺跡同様に曲線から直線への変遷を看取できる。

3) 甕上半部形態による分類 (分類2 図11)

5層では屈曲しないもの (ii類) が優勢である。しかし、上層である3層にかけて、屈曲するもの (i類) が優勢となる。このことから、マツノト遺跡同様ii類からi類への変遷がたどれる。

4) 底部形態による分類 (分類3 図12)

5層では平底 (ウ類) のみの出土である。しかし、3層になると圧倒的にくびれ平底 (エ類) が主体を占める。なお、4層出土の土器は、底部が欠損していて判然としない。

(4) サウチ遺跡の土器の分析

1) 層序的關係

サウチ遺跡は、鹿児島県大島郡笠利町喜瀬字サウチに所在する縄文時代～弥生時代、兼久式土器期の遺跡である (河口1978)。地区ごとに調査がおこなわれており、本論では層位的上下関係の確認できる北地区を対象とする。下層の5層は圧倒的な数量で弥生時代併行期の土器が出土している。

2) 文様による分類 (分類1 図13)

下層でみられない兼久式土器（Ⅰ類土器）が上層で出土する傾向は他の遺跡と同様だが、その比率は異なる。すなわち、3層ではⅠ類土器よりもⅡ類土器の比率が上回っている。

5層では、口縁部外面・貼付文・曲線（D b 1類）、口縁部外面・沈線文・曲線（D a 2類）が出土している。3層になると、口縁部外面・沈線文・直線（D a 1類）の割合が高い。D a 2類はみられなくなることから、マツノト遺跡・手広遺跡例にみられるように、沈線文における曲線から直線への変遷が予想できる。また、弥生時代併行期土器と沈線文・貼付文土器とが同一層から出土し、上層においても引き続きこれらが出土するという特徴を指摘できる。これは手広遺跡の様相と近似する。

3) 甕上半部形態による分類（分類2 図14）

5層では、屈曲するもの（i類）が6割を占める。3層においても同様の傾向でi類が主体となり、i類とii類の変化はみられない。

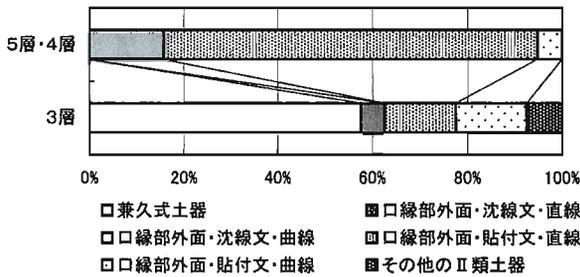


図10. 手広遺跡・文様の変遷（対象59点）

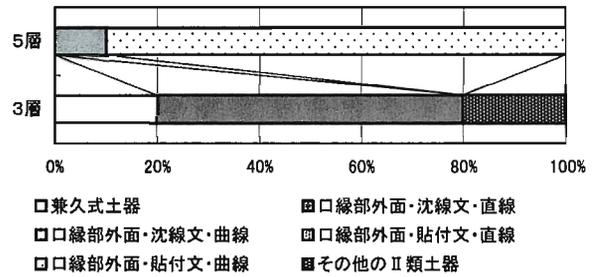


図13. サウチ遺跡・文様の変遷（対象15点）

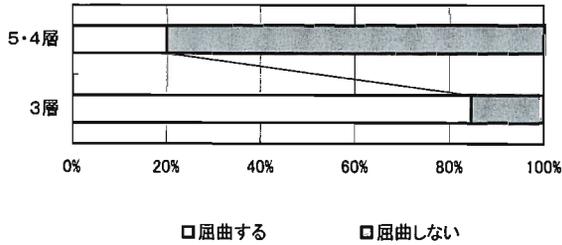


図11. 手広遺跡・甕上半部形態の変遷（対象28点）

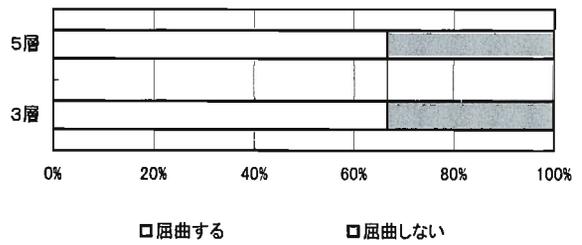


図14. サウチ遺跡・甕上半部形態の変遷（対象6点）

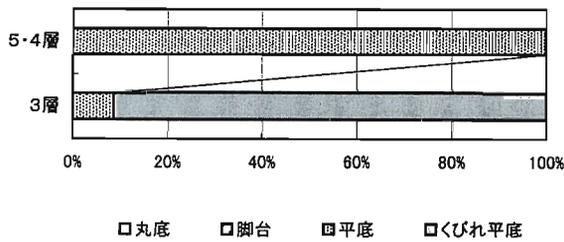


図12. 手広遺跡・底部形態の変遷（対象36点）

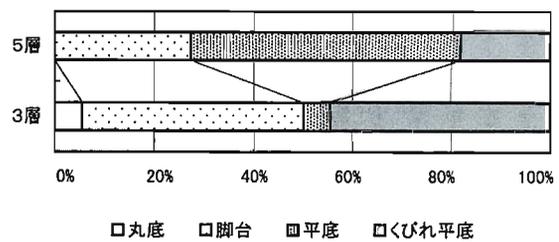


図15. サウチ遺跡・底部形態の変遷（対象29点）

4) 底部形態による分類 (分類3 図15)

5層では、平底(ウ類)が最も多いが、脚台(イ類)とくびれ平底(エ類)も一定数出土している。これが3層になると、イ類とエ類の出土が顕著になる。イ類が時間差にかかわらず主体を占める中、ウ類からエ類への変遷がみられる。この様相は他遺跡にみられない。

(5) 長浜金久遺跡の土器の変遷

1) 層序的關係

長浜金久遺跡は、鹿児島県大島郡笠利町和野長浜金久に所在する縄文時代から奈良・平安時代までの複合遺跡である(鹿児島県教育委員会1985、1987)。砂丘の4段階にわたる形成から、第Ⅲ遺跡の立地する砂丘が古く、第Ⅰ遺跡の立地する砂丘が新しい。第Ⅲ遺跡は手広5層・サウチ5層同様、弥生時代併行期の土器の出土を確認できる。しかし、外来土器の中に免田式土器や成川式土器(鹿児島県教育委員会1987)といった弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器も出土している。そのため他の2遺跡よりも時期的に下る可能性がある。

2) 文様による分類 (分類1 図16)

兼久式土器(I類土器)は第Ⅲ遺跡では出土しないが、そののちに形成される砂丘に立地する第Ⅰ遺跡では多数出土がみられる。

第Ⅲ遺跡および第Ⅰ遺跡21層では、口縁部外面・沈線文・曲線(Da2類)のみ出土している。その上層である第Ⅰ遺跡19層になると、I類土器が半数以上を占めるが、口縁部外面・沈線文・直線(Da1類)や貼付文土器(Db類)も出土している。沈線文の直線から曲線への変遷を指摘できる。

3) 甕上半部形態による分類 (分類2 図17)

第Ⅲ遺跡においては、屈曲するもの(i類)のみの出土である。これは、手広5層やサウチ5層の様相とは異なる。しかし、第Ⅲ遺跡はこの2遺跡よりも時期的に下ると予想されることから、弥生時代併行期における時期差を要因とした相違だと考えられる。第Ⅰ遺跡19層では、i類と屈曲しないもの(ii類)が同等程度出土する。

4) 底部形態による分類 (分類3 図18)

第Ⅲ遺跡では脚台(イ類)・平底(ウ類)が出土する。第Ⅰ遺跡19層では、ウ類も若干出土するものの、くびれ平底(エ類)が圧倒的な割合で出土する。このことから、ウ類からエ類への変遷を指摘できる。

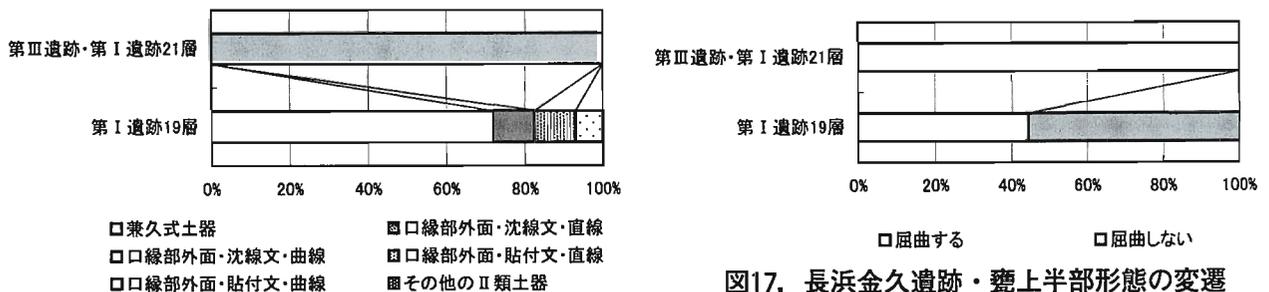


図17. 長浜金久遺跡・甕上半部形態の変遷 (対象48点)

図16. 長浜金久遺跡・文様の変遷 (対象62点)

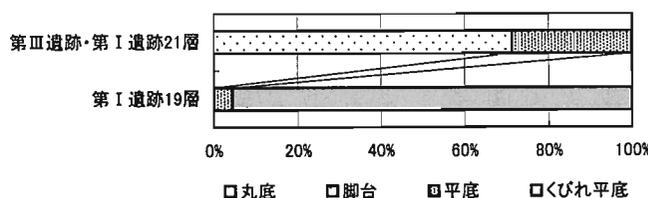


図18. 長浜金久遺跡・底部形態の変遷 (対象52点)

5. 考察

上記の分析をふまえ、土器の変遷について以下の特徴を述べる。

① 弥生時代併行期土器、および兼久式土器に伴うⅡ類土器の特徴

Ⅱ類土器は、弥生時代併行期の土器と同一の層に出土する。また一方では、兼久式土器（Ⅰ類土器）と同一の層からも出土する。これは、用見崎遺跡や面縄第1貝塚における開元通宝⁽¹⁾の出土から、7世紀前後に属する可能性が高い。これ以外に、Ⅱ類土器（D b 2類）は単独でも出土しており、いわゆるスセン當式に相当する。奄美大島に所在する小湊フワガネク遺跡の調査から、Ⅱ類土器が単独で出土する層は、兼久式土器が出土する層の下層に相当することが判明している（高梨2005）。以上から、Ⅱ類土器は弥生時代併行期から兼久式土器期まで長期間存続しており、弥生時代併行期を古段階、Ⅱ類土器主体期を中段階、兼久式土器期を新段階とする、段階的な3期区分に設定できる。

② 分類1における沈線文・貼付文土器の消長と変遷

弥生時代併行期・Ⅱ類土器主体期のⅡ類土器をみると、沈線文・貼付文土器とも主体的に存在する（図4、10、13、16）。これは兼久式土器期へ移るにつれて徐々に減少する（図4、10、16）。ただし、沈線文は減少するものの存在し続けるのに対し、貼付文は減少の一途をたどることが大きな違いである。しかし、全体的にみるとⅡ類土器は弥生時代併行期から一定数存在し続けることを指摘できる。

③ 分類1における沈線文・貼付文土器の文様構成の消長と変遷

弥生時代併行期のⅡ類土器をみると、曲線沈線文土器が多数を占める（図10、13、16）。これはⅡ類土器主体期において減少し、代わって直線沈線文土器があらわれる（図4、7、13）。兼久式土器期になると、直線沈線文土器が主体となり存在する（図4、7、10、16）。一方、貼付文土器においては、構成様相に変化はない。

④ 分類2における甕上半部形態の変遷

手広遺跡や長浜金久遺跡の状況から、屈曲が強くなっていく変遷を指摘できる（図11、17）。しかし、急激な変化ではなく、非常に緩やかなものである。

⑤ 分類3における底部形態の変遷

大きな特徴として、弥生時代併行期・Ⅱ類土器主体期にて脚台が比較的多く出土していることが挙げられる（図15、18）。Ⅱ類土器主体期に関していえば、スセン當式土器の底部が脚台であるという先行研究に矛盾しない。次に、弥生時代併行期と兼久式土器期における平底とくびれ平底の出土数の変化が挙げられる（図12、18）。兼久式土器期はくびれ平底が顕著であることから、兼久式土器とくびれ平底の相関性を窺える。

以上のことをふまえ、時期区分をおこなう。時期区分の設定は、先に設定した弥生時代併行期、Ⅱ類土器主体期、兼久式土器期の3期区分を基準とする。兼久式土器期は、他の要素の変遷からさらに3期に細分した。すなわち、分類2の屈曲しないもの（ii類）が主体となる時期（Ⅲ期）、分類2の屈曲するもの（i類）が主体となる時期（Ⅳ期）、分類1の曲線沈線文（D a 2類）の衰退する時期（Ⅴ期）である。これら、各要素の変遷を示したものを図19～22に示す。なお、単一文化層であるスセン當貝塚、万屋泉川遺跡、安良川遺跡の3遺跡出土のⅡ類土器についても、各分類要素の出現状況を明らかにし、整合する時期区分に加えた。先に述べた②～⑤は、それぞれ図19～22に対応する。

なお、最初の分類（図1）で有文土器と対比させた無文土器について、ここで付言しておきたい。無文土器⁽²⁾は、各期1遺跡ずつを対象とし有文土器と無文土器の比率を検討した（注2の図23）。これをみると、時期ごとに数値のばらつきがみられ一貫性がない。しかし、無文土器は若干ながら増加している。ここでは段階的ではない増加傾向と認識する。

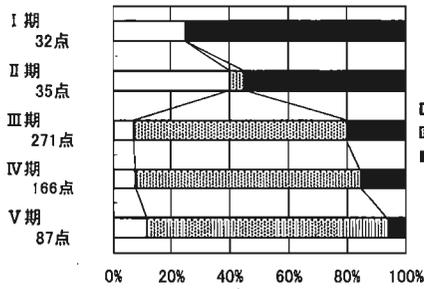


図19. 主体文様の変遷

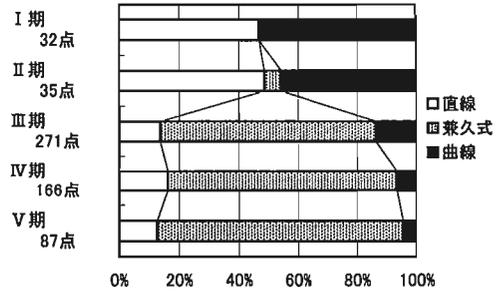


図20. 文様構成の変遷

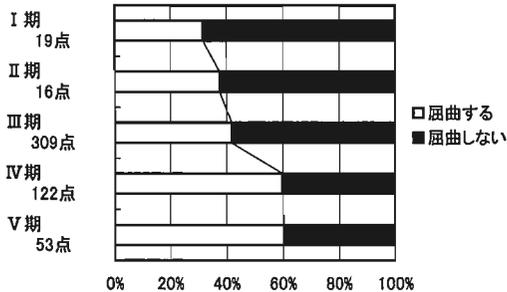


図21. 甕上半部形態の変遷

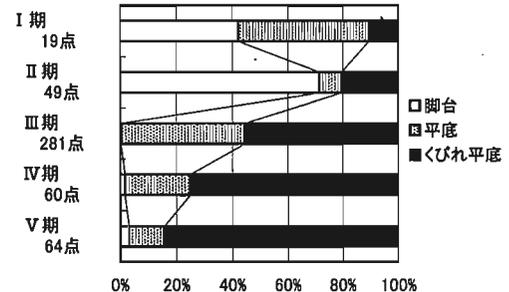


図22. 底部形態の変遷

※各時期に該当する遺跡・文化層

I期：手広・5層、サウチ・5層、長浜金久第Ⅲ

II期：マツノト・第2文化層、用見崎・ⅩⅥ層・用見崎・ⅩⅧ層、サウチ・3層、長浜金久第Ⅰ・21層、スセン當

III期：マツノト・第1文化層、泉川・3層

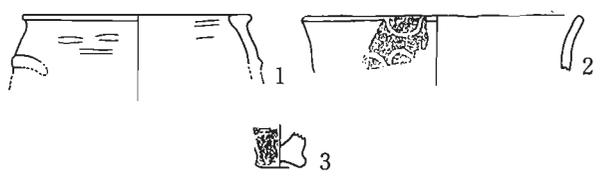
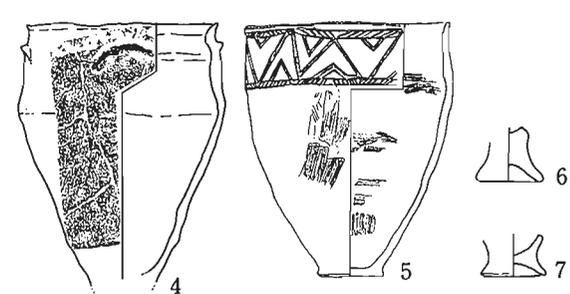
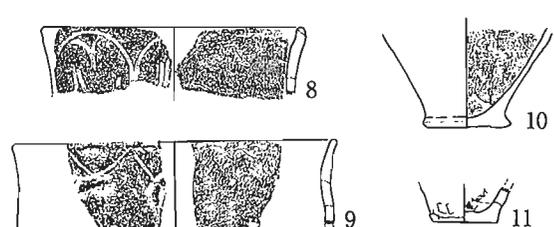
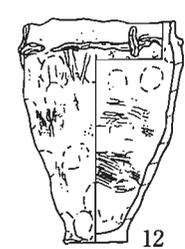
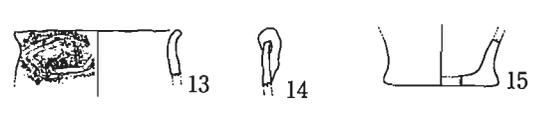
IV期：用見崎・ⅩⅥ層・用見崎3層、手広・3層、長浜金久第Ⅰ・19層

V期：安良川

6. 結語

図24は、Ⅱ類土器を弥生時代併行期、Ⅱ類土器主体期、兼久式土器期に区分し、それぞれを分類要素ごとに、段階的に整理したものである。これについて以下を指摘できる。

- ・文様では、沈線文や貼付文が減少する。口縁部形態は、Ⅲ期までは屈曲しないもの主体であるが、Ⅳ期以降に屈曲するものへと移る。底部形態の重心は、Ⅰ・Ⅱ期の脚台・平底からⅢ期以降のくびれ平底へと移る。無文土器も増加の傾向を示す。このように、Ⅱ類土器は、弥生時代併行期・Ⅱ類土器主体期・兼久式土器期の変遷に伴い漸移的に変化している。
- ・Ⅱ期に主体をなした直線貼付文がⅢ期以降、急激に減少している。脚台も同様の傾向を示す。Ⅲ期は兼久式土器成立期であることから、直線貼付文や脚台の減少は兼久式土器の影響の一端といえる。
- ・Ⅱ期とⅢ期の間には、画期が存在する。その背景は、現段階では在地の自律的变化ではなく何らかの外的要因による変化と捉えたい。その一要因として、貝交易を想定する。今後の研究課題としたい。
- ・各期の時期比定について述べる。サウチ遺跡では広田下層 ii タイプ貝符、用見崎・長浜金久第Ⅰ遺跡19層では広田上層タイプ貝符が共伴しており、貝符の編年観を参考にすると、Ⅱ期が古墳時代前期段階、Ⅳ期が古墳時代併行期の下限にあたると考えられる。また、Ⅰ期に含めた長浜金久第Ⅲ遺跡では、免田式や成川式がⅡ類土器と共に出土していることから、古墳時代併行期の上限に相当する。時期比定については今後も検討を続けたい。

分期	施文方法				口縁部形態		底部形態				兼久式土器	対応する主要な土器 (マツノト遺跡Ⅱ類土器)	変化の特徴
	沈線文		貼付文		屈曲する	屈曲しない	脚台	平底	くびれ平底				
	直線文	曲線文	曲線文	直線文									
I期												 <p>曲線文様主体</p> <p>サウチ・5層(1) 手広・5層 長浜金久第Ⅲ(2、3)</p>	
II期												 <p>直線貼付文多い 脚台主体</p> <p>手広・4層(4) マツノト1991・第2文化層(5) 用見崎・Ⅷ層 サウチ・3層(6、7) 長浜金久第Ⅰ・21層 スセン當</p>	
III期												 <p>兼久式の成立</p> <p>泉川(8~10) マツノト・第1文化層(11)</p>	
IV期												 <p>口縁部屈曲器形の定着</p> <p>長浜金久第Ⅰ・19層 用見崎・Ⅵ層(12) 用見崎・3層 手広・3層</p>	
V期												 <p>曲線文様の衰退</p> <p>S=1/7 安良川(13~15)</p>	

50%以上
 10~49%
 10%未満 (出土土器に占める割合)

図24. 奄美諸島古墳時代併行期の土器の変遷

謝辞：本稿は2005年度に提出した修士論文の一部を加筆修正し簡潔にまとめたものである。作成に際し、熊本大学の甲元真之先生、木下尚子先生、杉井健先生、小畑弘己先生には多大なご指導・ご教示を賜りました。また、鹿児島県大島郡笠利町教育委員会の中山清美氏、鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会の新里亮人氏からは、議論を重ねるなかで様々なご助言を賜りました。さらに、本稿作製にあたり以下の方々・各関係機関にご指導・ご教示・資料作成のご協力、並びに資料実見の機会をいただきました。末文ながら、ご芳名を記し、謝意を表します。

岸本義彦 鹿児島県立埋蔵文化財センター笠利町歴史民俗資料館 熊本大学文学部考古学研究室 津田勇希
中村和美 中村愿 東和幸 (五十音順 敬称略)

(注)

- 1 用見崎遺跡より出土した開元通宝は、初唐の特徴が明らかであり7世紀に属する可能性が高いとされる(木下2000)。
- 2 無文土器については、破片の場合、口縁部片5×5cm以上を対象に分析した。破片資料の場合、有文土器における無文部位と無文土器とを混同する危険性があるためである。

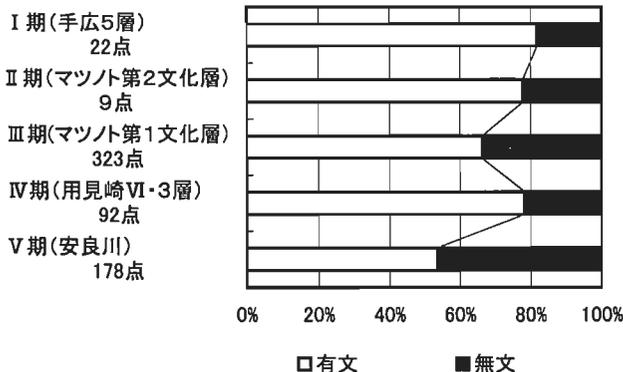
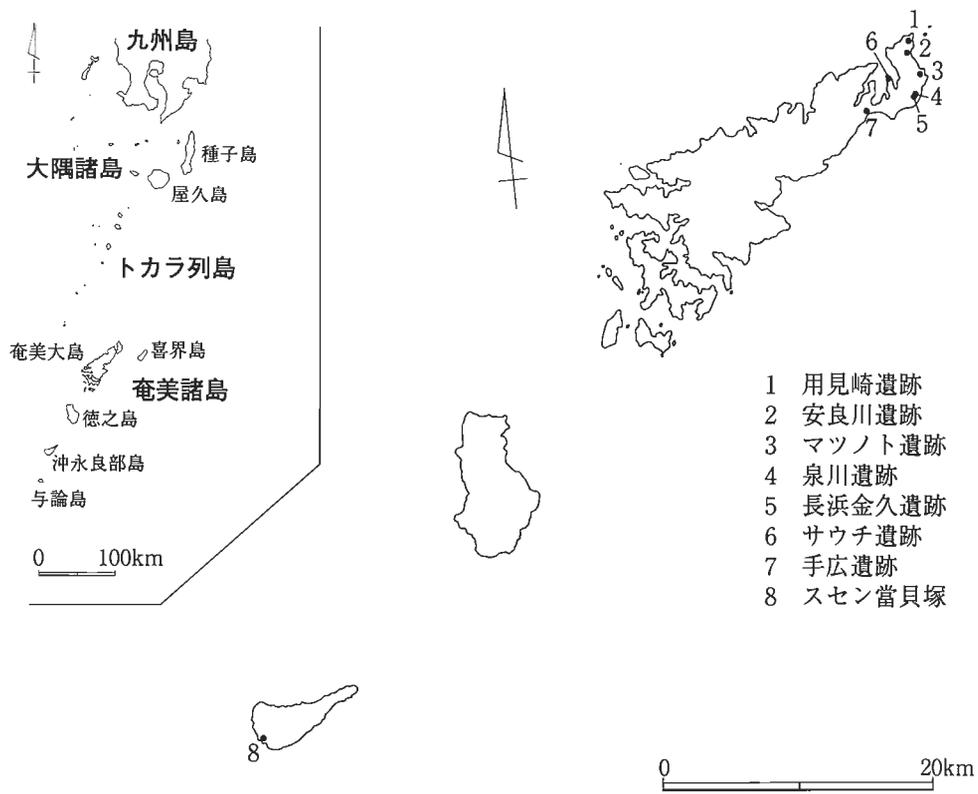


図23. 有文土器と無文土器の変遷

(引用・参考文献)

- 河口貞徳1974「奄美における土器文化の編年について」『鹿児島考古』第9号 pp.12-68鹿児島考古学会
- 河口貞徳(編)1978「サウチ遺跡」『鹿児島考古』第12号 pp.1-159鹿児島考古学会
- 木下尚子2000「開元通宝と夜光貝-7~9世紀の琉・中交易試論-」『琉球・東アジアの人と文化(上巻)』pp.187-219 高宮廣衛先生古希記念論集刊行会
- 木下尚子2003「第1節 用見崎遺跡の概要」『先史琉球の生業と交易-奄美・沖縄の発掘調査から-』改訂版 pp.3-6 熊本大学文学部
- 木下尚子2005「貝交易からみた異文化接触」『考古学研究』206pp.25-41考古学研究会
- 熊本大学考古学研究室1986「手広遺跡(概報)」熊本大学考古学研究室
- 鹿児島県教育委員会1985「長浜金久遺跡」鹿児島県教育委員会
- 鹿児島県教育委員会1986「泉川遺跡」鹿児島県教育委員会
- 鹿児島県教育委員会1987「長浜金久第遺跡(第Ⅲ・第Ⅳ・第Ⅴ遺跡)」鹿児島県教育委員会
- 新里貴之1999「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類学研究』第11号 pp.75-106 人類史研究会
- 新里貴之2000「スセン當式土器」『琉球・東アジアの人と文化(上巻)』pp.153-173 高宮廣衛先生古希記念論集刊行会
- 高梨修2005『ヤコウガイの考古学』同成社
- 堂込秀人1998「南西諸島中部圏の弥生時代相当期の土器文化-文化変容と沖縄貝塚時代との関係への手がかり」『環東中国海沿岸地域の先史時代』pp.243-252
- 中山清美1992「マツノト遺跡発掘調査概報」『奄美考古』第3号 pp.15-8 奄美考古学研究会
- 中山清美2005「安良川遺跡における兼久式土器の型式分類」『鹿児島考古』第39号 pp.62-81 鹿児島県考古学会
- 若杉あずさ(編)1997「I 用見崎遺跡IV」『考古学研究室報告』第33集 pp.1-53熊本大学文学部考古学研究室
- 若杉竜太・尾上博一(編)1996『用見崎遺跡Ⅲ』熊本大学文学部考古学研究室
- 山田康弘・原田範昭(編)1995『用見崎遺跡』熊本大学文学部考古学研究室



付図. 本稿で言及する遺跡の位置